刈谷市歴史博物館
甲冑まつり

現代甲冑師による
甲冑展示会

現代甲冑展

げんだいかっちゅうてん

伝統技術の祭典

2022年3月23日㊌～4月3日㊐

講演会

3月27日（日）午後1時30分～3時迄

「甲冑の沿革とよろず話」 講師＊甲冑師 熱田伸道

主催＊刈谷市歴史博物館　展示協力＊一般社団法人 日本甲冑武具研究保存会・東海甲冑師会

伝統技術の祭典
現代甲冑展開催にあたって

このたびは『－伝統技術の祭典－現代甲冑展』にお越しいただき、誠にありがとうございます。
この甲冑展は東海甲冑師会が中心となり、全国にて活躍する甲冑師をはじめ甲冑制作の愛好家の作品が集う、国内でも稀に見る甲冑の祭典となります。
日本の伝統工芸を用いた総合芸術ともいえる甲冑は、戦に応じて進化を遂げ、戦のない時代となっても、先祖の武功を後世に伝えるべく甲冑が作られ受け継がれてきました。
その伝統と文化を残し伝えることを目的とした当会の意志のもと、甲冑の素晴らしさを広く世に伝える活動の一環として開催され、第三回を迎えました。
展示されている主な甲冑は、戦国時代である桃山時代から江戸時代初期の当世具足となり、また、当時の意匠を取り入れながらも作家の個性を表現した作品となっており、どの作品も長い月日を経て制作した渾身の逸品となります。
現代に蘇る、武士の息吹をご堪能ください。

一般社団法人 日本甲冑武具研究保存会
東海甲冑師会
甲冑師　熱田 伸道

甲冑師
熱田 伸道
（小川 仲夫）
愛知県名古屋市在住

PROFILE〈プロフィール〉

昭和23（1948）年● 東京都足立区に生まれる
昭和56（1981）年● 甲冑制作活動始める
平成14（2002）年● 前田利家公甲冑復元（名古屋市中川区浄海山観音寺蔵）
平成17（2005）年● 第一回現代甲冑展（犬山城郭内「茶室」）
平成19（2007）年● 第二回現代甲冑展（名古屋城西の丸会館）
平成21（2009）年● 酒井家二代家次公甲冑修復（公益財団法人 致道博物館蔵）
平成28（2016）年● 加藤清正公最上金胴丸推定復元（山形県鶴岡市金峯山天澤寺蔵）
令和 3（2021）年● 水野勝成公着領甲冑推定復元（野田八幡宮奉納・現在刈谷市歴史博物館蔵）

中学生の頃から日本の歴史が好きで、特に戦国時代の武具に興味を持つ。制作を始めたのは33歳、愛知県一宮市佐藤敏夫先生に師事、教えを乞う。その後修復の依頼をこなすとともに新作を行う。また、東海甲冑師の道「心得」に準じ、甲冑師7名、生徒百数十名を育てる。（清須甲冑工房、犬山市甲冑制作同好会、関市甲冑制作同好会、中日文化センター甲冑制作教室、荘内藩甲冑研究会、庄内丸岡城甲冑制作同好会）

現在、自宅工房で修復・復元を行うとともに新作冑及び重量を軽減した祭事用「アルモデルキット」を制作し、日本甲冑の啓蒙・事業を展開実施中である。

甲冑師
刈屋 伸尚
（近藤 尚登）
愛知県刈谷市在住

PROFILE〈プロフィール〉

昭和32（1957）年● 4月生まれる
平成22（2010）年● 熱田伸道氏に師事
平成30（2018）年● 甲冑師としてデビュー

小学生の頃から武具・刀剣に興味を持ち、戦国時代の戦記物や刀剣の説明書を読むのが好きであった。戦国時代に当時の武士がこれらの武具を身に着け、千軍万馬往来して一国一城の主になっていく姿を思い浮かべワクワクしていた。

大学卒業と同時に刈谷市役所に奉職し、文化財の担当となり、東京はじめ各歴史博物館にて実物の武具を目にすることで益々興味を持つようになり、50歳頃より見様見真似で甲冑制作を始める。そんな折、名古屋に住む甲冑師・熱田伸道氏に出会い師事する。8年間制作を学び、甲冑一領と三十二間筋冑を完成。日本甲冑の歴史を文章にまとめ、師匠より甲冑師を名乗ることを許される。

平成30年に退職と同時に自宅に「井ケ谷甲冑工房」を構え、日々制作に精進し研鑽を積んでいる。今後は刈谷市を中心に西三河にて甲冑文化を広めるよう努力していきたい。

甲冑師
蒲郡 伸嘉
（横田 嘉明）
愛知県蒲郡市在住

PROFILE 〈プロフィール〉

昭和20（1945）年●9月生まれる
平成17（2005）年●熱田伸道氏に師事
平成22（2010）年●甲冑工房よこたを開設

平成17年60歳で退職後、犬山城を観光。その折、城内にて甲冑工房の看板が目に入った。中には甲冑師・熱田伸道氏が作業をしており興味を誘われた。「私でもできるでしょうか」と尋ねると「好きならできる」との返事。それ以来「甲冑工房おがわ」へ週4回欠かさず通って教えを乞う。5年の修業を積み、甲冑一領と三十二間筋冑を作った。

平成22年自宅に「甲冑工房よこた」を開設。現在修復・新作を行いながら、「蒲郡くらふと展」にて甲冑展示及び試着体験を行い、子供向けに小札加工品を販売し甲冑文化の推進・啓発を図っている。また、地元の蒲郡市の「上之郷城跡を愛する会」に所属し、歴史遺産をいかしたイベントの啓発活動をしている。

兜師
岩村 英珍
（市島 英司）
岐阜県恵那市在住

PROFILE 〈プロフィール〉

昭和34（1959）年●10月生まれる
平成16（2004）年●甲冑師 藤澤宗忍氏に師事
令和 元（2019）年●甲冑工房岩村を開設

学生の頃から城と戦国時代が好きで各地を旅する。息子が生まれた節句の飾り兜を探したが気に入ったものを買い求められなかった。そんな時、兜の展示会があり会場で見た雑賀冑の美しさに感銘を受け、その制作者である伊賀上野の甲冑師・藤原宗忍氏に師事する。最初から雑賀冑の制作は困難を極めるため、手始めに変わり冑を制作し、節句飾りの馬蘭後立付き一の谷冑を制作した。その後、長烏帽子冑等を制作し雑賀冑の制作に挑んだ。

雑賀（さいか）の基本は鉄錆地で叩きだしの凹凸が多い。金槌で叩いた面が直接露出するため、ごまかしがきかない。しかし納得できるまで叩けば美しい形状が描ける。

名古屋の自宅では近所への騒音が気になるため、岐阜県恵那市の岩村に工房を開設し、創意工夫研鑽し、当世具足、雑賀冑を制作している。現在までに和製南蛮甲冑二領、変わり冑八頭、雑賀冑十頭を制作、雑賀の冑専門の甲冑師を目指している。

AM 甲冑師
髙橋 弘
山形県鶴岡市在住

PROFILE 〈プロフィール〉

昭和45（1970）年●1月生まれる
平成24（2012）年●荘内藩甲冑研究会主催 甲冑制作教室に参加
平成27（2015）年●大将級甲冑一領、足軽級甲冑二領制作
平成29（2017）年●熱田伸道氏の弟子となる
令和 元（2019）年●河北町谷地八幡宮神事用甲冑四領修復
令和 3（2021）年●舞台用甲冑（井伊直政公）制作

荘内藩甲冑研究会の発足経緯である「甲冑文化の継承」を担うべく、当会の理事を務める傍ら甲冑制作教室を開講。制作した甲冑を活用し「武者隊」を結成、プロの俳優から殺陣を教わり地域の行事・イベントに多数出陣し、荘内藩酒井家の歴史を伝える活動をしている。JR東日本「TRAIN SUITE 四季島」鶴岡駅停車時の演武でのお迎えを行い、NHK BSの番組にて紹介される。

実戦で用いられた甲冑は堅牢性と機能性を備え、華美な装飾を施さずとも気迫に充ちており、その造形美に惹かれるところが多くある。武士の強い意志、当時の匠の技と息づかいが感じられる甲冑制作に勤しんでいる。

甲冑 かっちゅう

栗皮色塗紺糸威塗上仏胴具足

尾州熱田住
熱田 伸道

慶長五年（1600）関ヶ原の戦いに勝利した水野勝成は、その感謝の気持ちを野田八幡宮に着領した甲冑を奉納した。現在、冑・面頬、胴甲、片籠手・片袖、臑当が、歴史博物館に保存されている。本甲冑はそれらを計測した推定復元である。佩楯は昭和三年（1928）発刊の『日本甲冑の新研究』を参照した。

鉄銀箔押紺糸裾濃胸取桶側胴具足

尾州熱田住
熱田 伸道

現代人の身長180cmを想定して制作したもので、銀箔押しを施し、胸、袖、草摺を紺糸裾濃毛引威としている。冑は十間突盔形筋冑で三段の金箔押割鞠をつけている。桃山文化をねらったものである。

裾濃…威の糸の色が、下に向かうにつれて濃くなること。
桶側胴…鉄や革でできた長方形の板を、鋲で留め合わせて作る胴の一種。

鉄黒塗胸取桶側胴具足

参州刈谷住
刈屋 伸尚

戦国武将・明智左馬之助秀満の冑を参考に、頭形冑の頭頂部を高く叩きだし、兎耳をつけている。胴甲は胸取の桶側二枚胴、袖は仕付けとし、各部位に「桔梗紋」を施す。桃山文化を想定した加飾性の高級甲冑で、現代の日本人の身長に合わせて制作している。

明智秀満（生年不詳～1582）…明智光秀の重臣。通称左馬之助。
琵琶湖の「湖水渡り」伝説も有名。

朱塗横矧桶側二枚胴具足

参州蒲郡住
蒲郡 伸嘉

現代の成年男子の体形に合わせ、桃山期から江戸初期の甲冑を推定したもの。材料にアルミを採用した「アルモデル」製で、鉄より軽く、紙やプラスチックより程よい重量感がある。重さは7kgほど。横に板を矧ぎ合わせた桶側胴で草摺、袖も一枚一枚強度を増すために叩き矯めをつけている。

鉄錆地塗縦矧桶側五枚胴具足

羽州秋田住
山谷 剛輝

冑は縦矧ぎの雑賀で、前立の中央に不動明王、左右に大日如来の「金剛界」「胎蔵界」の梵字を置き、脇立に立波頭をつけている。胴甲は縦矧ぎの五枚胴、面頬は燕頬、他に篠籠手、板佩楯、篠臑当が付属する。

大日如来…密教において宇宙の真理を表し、また宇宙そのものである仏。
他の仏も大日如来から生まれた化身とされる。

鉄錆地和製南蛮二枚胴具足

濃州恵那住
岩村 英珍

切鉄七枚伏せ、七枚張り本雑賀冑である。切鉄には葵頭と唐草模様を配し、正面に金箔押し毘沙門天梵字を付した。二枚胴具足の正面中央および籠手にも葵頭と唐草模様を、袖および草摺には葵頭を配した。

雑賀冑…紀伊国雑賀（現在の和歌山県和歌山市）で登場した形式の冑。
異国的な雰囲気があり、室町時代末期頃から多く見られる。

朱塗黒糸威塗上仏胴具足

羽州庄内住
髙橋 弘

舞台用に依頼を受け制作。冑は井伊直政所用の召替具足と伝わる『朱漆塗紺糸威桶側二枚胴具足』を模し、五枚の鉄板を矧ぎ合わせた頭形に、立物は金の天衝脇立とした。胴は関ヶ原の戦いにて着領したと伝わる『朱漆塗仏二枚胴具足』を模している。威糸は元来の黒糸威とした。

井伊直政（1561～1602）…“徳川四天王”の一人で、彦根藩（現在の滋賀県東部）の祖。
「井伊の赤備え」と呼ばれる、赤色の甲冑の軍団を率い、関ヶ原の戦いなどで武功を挙げた。

仁王胴具足

尾州大須住
安藤 満

冑は鉄地の椎の実兎耳形で、全体のバランス・色に重点を置く。特に、冑側面の目玉に球体ガラスを切断したものを使用している。胴甲・冑の盛り上げは、軽量を図るため紙粘土・和紙を幾重にも貼り重ね、成形されている。

仁王胴…腹と背で各一枚の鉄板を用いる「一枚張打出胴」のうち、
あばら骨やへそが打ち出してあるもの。

鉄磨地鳩胸胴具足

尾州大須住
安藤 満

南蛮風を意識して制作。鉄地をそのまま表すため、凹凸ができないよう打ち出しをしている。蝶形の後立は、手足の関節が作られ、実際に動かすことができる。

鳩胸胴…腹と背で各一枚の鉄板を用いる「一枚張打出胴」のうち、
胸の位置が盛り上がっているもの。

冑 かぶと

鉄黒塗十二間突盔形筋冑

尾州熱田住
熱田 伸道

本多忠勝冑の推定復元。南蛮冑を参考にして制作したもので鞠は四段で、緩衝として燻韋をつけている。面頬は鉄黒塗りで、三段の素懸の垂れをつける。前立に守護神として獅噛をつけ、脇立に大きな鹿の角（和紙の張懸）をつける。敵味方からも目立ったであろう。

燻韋…ワラや松葉を火にくべ、その煙でいぶした革。
素懸…鉄や革でできた小さな板（小札）を、糸やひもなどを用いて、間隔をあけて結び合わせる手法。

鉄黒塗六間突盔形筋冑

尾州熱田住
熱田 伸道

天正十年（1582）に起こった本能寺の変で、織田信長の次男・信雄が焼け跡から探し出させた信長の冑を推定復元したもの。天草眉庇の覆輪に鍍金をし、高級感を表す。鞠は金箔押し三段の紫糸毛引威割鞠。前立は江戸中期に流行ったカマキリを造形した。

天草眉庇…眉庇が水平に前へ突き出たもの。
毛引威…鉄や革でできた小さな板（小札）を、糸やひもなどを用いて、隙間なくつなぐ手法。

鉄黒塗六枚張椎の実形冑

尾州熱田住
熱田 伸道

南蛮冑を模倣したもので椎の実に似ているところから名付けられた。桃山期の推定復元で、脇立に貝形を和紙でかたどって金箔を押し、内側に三匹の勝虫を描いている。鞠は日根野鞠五段で白・茶の寄毛引である。面頬は猿頬で三段の垂れ、練革の古式金箔押しの勝虫をつけている。

練革…牛の生皮革を、膠を溶いた水につけて柔らかくし、数枚重ねて叩き、密着させた革。

鉄銀箔押三十二間筋冑

尾州熱田住
熱田 伸道

三十二枚の鉄板を矧ぎ合わせた冑で、銀箔押しを施す。鞠は日根野五段、卯の花中紅糸毛引威、面頬は同銀箔押しの猿頬、三段の垂れをつける。前立は、蝶番付き金箔押し三日月形。桃山期の推定復元である。

日根野鞠…下部分が肩の形に沿ってそり上がり、後ろ部分が垂れ下がる鞠。
猿頬…猿の顔に似た形の面頬。半頬ともいう。

鉄錆地縦矧雑賀冑

参州刈谷住
刈屋 伸尚

全体の形状は箱型で、細幅の鉄板を置手拭形方式で矧ぎ合わせ、そこに平頭座鋲を打つ。表面は塗りが乾く前に細かい砂を吹き付けさらに上塗りをし、鉄錆感を出すとともに古び粉にて時代付けをした。眉、見上げの皺、側面に文字を打ち出す。鞠は日根野鞠五段で小さな吹き返しをつける。

置手拭形…頭に手ぬぐいを載せたような形の冑。

鉄黒塗三十二間筋冑

参州蒲郡住
蒲郡 伸嘉

細長い台形の鉄板三十二枚を重ね、鋲留めをし、筋を立てたもので、六十二間筋冑の原型となる冑である。後ろを高くして成形（後勝山形）するのは熟練を要する。前立は中央に祓立を設け、真ん中に剣形、左右に鍬形の立物（三鍬形）をつけ、金箔押しをしている。

祓立…前立を差し込むための四角形の筒状のもの。

六枚張椎の実形冑

愛知県刈谷住
加藤 雪邦

椎の実形冑とは、突盔形冑の一種で、その名のとおり椎の実のようにとがった頭頂部をもつ。着色は黒塗りのカシュー塗料（カシューナッツを原料とする塗料）を使用している。

六枚張椎の実形冑

ケンタッキー州
グリーンビル住
**ハリス
ダスティン**

着色は出身地であるケンタッキー州を象徴する鳥（カーディナル）にちなんで赤を主体とした。
前立は同州の花（オオアワダチソウ）をデザインしている。

カーディナル
（ショウジョウコウカンチョウ）

六枚張椎の実形冑

愛知県常滑住
坂田 正敏

前立は県のシンボル「カキツバタ」を形どり玉虫箔を使用し、前面に「ハナノキ」を描いている。
咽喉輪は素懸より複雑な毛引威とし、絵韋は鹿韋を使用した。

カキツバタ

六枚張椎の実形冑

愛知県岡崎住
長坂 正登

本作は南蛮で使用していた冑を日本風に作り変えたもので、六枚の鉄板を矧ぎ合わせ、下地で塗り上げている。防具として実に理に適った形状である。
前立は大陸より伝来した守護神の獅噛である。

獅噛…口を大きく開き歯牙を表す獅子に似た獣面。

鉄錆地置手拭形冑

濃州恵那住
岩村 英珍

雑賀独自の鋲を多用した冑で、上部の鉄板は二枚、角状の鋲は鉄板を丸めて作ったものを正面から一直線となるよう配置した。見上げの皺を打ち出し、置き眉を付し、眉庇・吹き返しに覆輪を施す。

覆輪…金や銀などで縁取りすること。

鉄黒錆地置手拭形冑

濃州恵那住
岩村 英珍

天板の後方を長く流線形にした置手拭で、先を尖らせた鋲は釘を利用し、座盤は鉄板に小刻みをいれて制作した。見上げの皺を打ち出し、眉は小刻み座を下に配し二重とした。座鋲を多く使用するのが雑賀冑の特徴である。
緑茶で煮沸処理して黒錆に仕上げた。

東海甲冑師会

《東海甲冑師会とは》

本会は、愛知県名古屋市を中心に日本甲冑の防具として完成された当世具足（桃山時代～江戸時代初期）を主とした制作技術、制作方法（次第）を習得し後世に伝承することを目的とします。

現在、愛知県名古屋市、清須市、犬山市、江南市、刈谷市、蒲郡市、岐阜県関市、山形県鶴岡市、秋田県能代市で活動する甲冑師及び甲冑制作愛好家数百名とともに総合芸術である甲冑に携われることを誇りとし、後世に伝承するため研鑽しております。

《東海甲冑師の道『心得』》

●鉄製にて桃山時代～江戸時代初期の当世具足一領を制作する。塗りは漆またはそれに準じるもの。形式は数種類ある中から自分の好む一領を選び、着領者の体型に合わせ制作する。完成後は着領し動作確認を行い、無理な箇所が生じた場合は補修し、書き留めておき次回制作に生かす。

●鉄製にて三十二間筋冑を制作する。塗りは漆またはそれに準じるもの。南北朝時代に発生、強度を保ち、さらに軽量化することを追求し、完成に至ったのが六十二間ともいえる。その基本となる三十二間を制作し、その構造を掌握。完成後、着領し機能を確認する。特に機能に関しては、深く被って前方が見渡せるかどうか注意する。対角となる筋の正確さ、全体のつくりなど美的感覚を養う。

●桃山時代から江戸初期の当世具足の知識を会得すること。

侍－サムライ－アルモデルキット

自らの手で、「本格的な甲冑を作りたい！」という想いを叶えるために考え出されたのが『侍－サムライ－アルモデルキット』です。戦国期の甲冑に忠実な本格仕様で、本来は鉄製の甲冑を軽量なアルミ製とし、甲冑師が一つ一つ丹念に槌で打った40点ほどの部品を自ら仕上げていきます。

完成品とは違い、作る過程を知ることで甲冑についてより学ぶことができ、知的好奇心を満たすのもこのキットの魅力の一つです。

実際に着領した際も、鉄より軽いことから長時間の着領も負担とならず、また、メンテナンスについても鉄のように錆びないことから手入れや管理が容易です。

甲冑師によるアフターフォローもあり、入門として最適な甲冑となります！いざ！戦国の世界へ!!

詳しくはこちら!

甲冑工房おがわ
ホームページ

アルモデルキット（一部）